

豈に吾國を思はざらん哉の御言も單に日本に生れたから日本を愛さねばならないなど云ふケチな考へではなく世界人類の最後平安の爲めに特に道義的建國の日本を愛されたことは事實である、即ち正法を護持し弘布せんとするの國であるから或る場合正法正義に従はぬ國家とは命懸けで戦はねばならぬこともあるであらう、かゝる精神は聖人に充ち満ちて居られたから前に述べたやうに眼前の小事に拘泥せられず而かも他の宗教のやうに一人一人の教化からして最後に善を見やうとするのでなく、これも強ちに惡ではないが聖人は最も速に正法弘布を目的とせられたから、先づ國家といふ全體を對告としてこれを説かれたのである、其れには先づ其の當治者たる即ち其の當時の幕府の執權等から最初に目醒めねばならないといふ見地から之を其の許に提出して大いに覺醒を促されたのである。

強いて附言するまでもないが聖人は妙法五字の體驗の上の愛國者であることは勿論である、故に門下吾世
界人類は俱にこの眞理の示す所に従つて人類の思想及び行動を桎梏して行かねばならぬ。



吾が崇拜せる大聖人

吉 田 曙 人

英雄時代を産むか？時代英雄を出だすか？、茲に吾が崇拜せる大偉人、大聖者あり。果して誰ぞ？余は天下一の愚人日本歴史を翻き習ふ事數度に及ぶ然れ共未だ嘗て一人の崇拜すべき者真心より戀慕すべき人を得ず、所謂有徳者！國家功勞者！言ひ換ふれば忠君愛國者、大政治家等は枚擧に暇あらず。今其の中に於て二三の偉人を擧ぐれば忠君愛國燃ゆるが如き、楠公父子、近くば乃木將軍、學徳兼備の二宮尊徳、中江藤樹、政治家としては、最近明治大維新に其天才を振起して内外に其名を稱せられし伊藤博文の如き其人等ならんか。然れども彼等は何れも唯單に當時紊亂の世に出で、政治家或は忠君愛國家としての個人的又は國家的本

分を果せるのみ、従つて國內の渴仰は歴史と共に永遠に消えざれども崇拜の範圍狭くして、他國の人は是を知らず。然るに吾人が最も崇拜せんとする大聖人、大偉人は如斯き個人的若くは單に一國家の自分を全せるものに非ず、世界人類引いては宇宙全體の煩惱、業、苦、の三道に惱む生類に安心立命を與へ解脱を得せしめんとし四弘の大誓を立て給へり。時は是れ白法穩没所は是れ神州東海の一隅梅陀羅が家、法は是れ一代の歸趣諸佛出世の本懷なり、單身鎌倉の街頭に立ち、身に金欄の袈裟、紫衣を欲せず、麻の衣に麻の袈裟、末の尾笠に六度の杖、手首に大粒の念數を懸け、押し寄せ、押し返す人波の塵垢を浴びつゝ、四ヶ格言の法劍を振ひ、破邪顯正の矢を放ちて大獅子吼せる一怪僧！忽ち起る持品廿行の佛識刀杖瓦石、數々見擯出、遠離於塔寺等の大難に反つて廣宣流布の疑ひなきを喜び給ふ大聖僧抑も誰ぞや知らずや、是れ本化上行の再誕、立正大師その人なるを。古來幾多の聖者あれども未だ嘗て大師の如き人格、教義、及抱負を有せし人を見ず。

試に御遺文録を拜せよ、四大難の一、北海の寒島たる佐渡が島根に於て皮を剝いで紙となし、骨を削つて筆となし、血を以つて水となし、軒は一問、雪は一丈、壁落ち、柱朽ち、梁棟傾き倒れんとせし三味堂に於て身は流人ながら、書き認めたる一鈔名付けて開目と云ふ。此の文中に「我日本の柱と成らん、我日本の大船と成らん、我日本の眼目と成らん云云」等と何ぞ其の言の雄且つ大なるや、内外の憂患踵をついで起り國家危急存亡の秋に當り身を犠牲に供して以て國難を救ひ、國家を泰山の安きに置かんとす、上人は國家の盛衰を以て一に國民の思想を支配せる宗教の直曲に有りとなし釋尊出世本懷眞實の法華經を以て國民思想を善導し以て國家を隆昌ならしめ國難を拆除せんとせり、而して此の經綸は單に我日本國に止まらず、引いて全世界に及ぼし以て無上究極の平和及び發展を此の地上に實現せんと努力せられしなり。而して是の理想を實現すべき使命を有せるは一向大乘有緣最勝無二の日本國なり。如是き根本信念の下に先づ日本國內に其の教田を開拓せられしなり。此れ日蓮が使命なり。國家世界に對する本分なりと信じ以て顧みざりき。南朝忠臣、楠正成の忠君愛國家にも超へ、大政治家として自己のみにて國家を操りし、伊藤博文にも勝れたる大愛國家、大忠臣家なり。否恐らくは社會識者の等しく我と共に認むる所ならん、此の偉大なる聖者は未法濁惡、白法穩没、

惡鬼充滿の世に出で法華經の題目を以て迷へる人類をして悟の彼岸に到達せしめんことを。嗚呼その大悲に思ふべし。報恩鈔に「日蓮が慈悲廣大なれば南無妙法蓮華經は萬年の外、未來迄も流布すべし云云」聖言虛しからず。今や我が大師去つて六百五十星霜然れ共その教や益々廣く、その渴仰や愈々多し、然れ共大法獨り弘まらず、古人云々大法の隆夷は正に其人に依ること、如是き大人格者、大教義、大慈悲を普く天下に説き以て社會を善導し發展せしむるものは唯吾本代の徒のみ有つて存す、勵まざるべけんや。



如何にして人心を統一し國民精神作興の 實を擧ぐべき乎

古 童 每 水

社會に對して學校教育以上の効果を奏しつゝありと謳歌さるゝと共に、又一面に於て民心をして幾多の弊害へ導くものは是れ實に新聞紙及び雜誌等の文書類にあらずや、而して讀者も亦一日たりとも之を手離す能はざること恰も食餌の必須なるに相似たり、近來我國有識階級に國民精神作興、又は人心の歸嚮統一を圖らざるべからざるを論ずる者あり、然るに言論の自由が憲法に於て保證されたる我國に於て人心を統一せんとするは此に多少の詮衡を要する所なるべし、言論を自由にして置きつゝ思想を統一せんとするは、猶堤防を撤して水を一所に落さんとすると一班なり、夫れ昔時に於ける我國の民心は其指導を政治家に俟ちし所多かりしなり、然るに近來に至り専ら新聞雜誌著述物等の言論機關及び多少の藝術等に依りて感化指導され、政治は殆んど事務の上に局限されたる感なき能はず、就中日日各新聞によりて報道され記事に載せらるゝ諸事項は、如何に人心を左右するかは喋々するを要せざるなり、而し其の一思想の潮流の漲るに至りてや、中央政府の威嚴を以てするも、尙其の一喝に遇へば忽ち昨日の命令を撤去して今日の鼻息を窺はざるべからざる